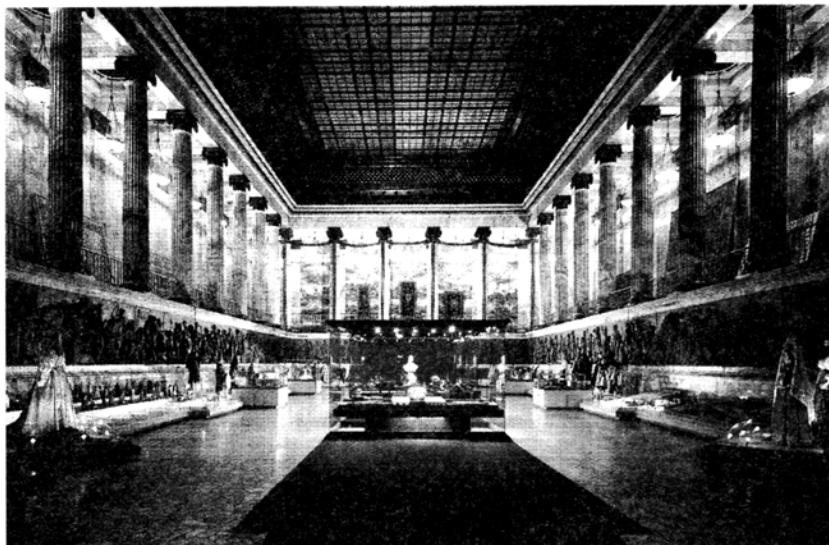


サンクトペテルブルグの アイヌ資料調査 3

千葉大学の荻原眞子教授を研究代表者とするロシア共和国サンクトペテルブルグ市内にある博物館所蔵のアイヌ関係資料の調査は、1995、1996年のロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（略称：MAE）に引き続き、1997年からロシア国立民族学博物館（略称：REM）で調査が進められている。

1995年のMAEの調査終了時にREMを訪ねて、その収蔵品の一部を見せていただいたが、その点数の多さには一同驚かされた。博物館の説明では約2,600点余とのことで、そのため調査はMAEの調査が終了してから行うこととなった。

1997年度の調査参加者は荻原眞子氏（千葉大学）児玉マリ氏（アイヌ民族博物館）小谷凱宣氏（名古屋大学）佐々木利和氏（東京国立博物館）長谷部一弘氏（函館市博物館）内田祐一氏（帯広百年記念館）鈴木邦輝氏（名寄市北国博物館）藪中剛司氏（静内町郷土館）小泉健氏（モスクワ大学）に当センターから古原敏弘・大谷洋一が参加した。1998年度は荻原眞子氏（千葉大学）福士廣志氏（留萌市海のふるさと館）鈴木邦輝氏（名寄市北国博物館）出利葉浩司氏（北海道開拓記念館）吉田睦氏（ロシア科学アカデミー人類学民族学研究所）村木美幸氏（アイヌ民族博物館）藪中剛司氏（静内町郷土館）小泉健氏（モスクワ大学）に当センターから古原敏弘・大谷洋一が参加した。2年間の延べ参加者は21名である。



ロシア国立民族学博物館(REM) 内の大理石の間

《REMの概要》

REMでは19世紀から20世紀のロシア国内（ウクライナ、ロシアから中央アジア、シベリア極東まで）の約150以上の民族文化に関する500,000点の資料を所蔵している。また海外などへ積極的に展示品の貸し出しなども行っており、そのための展示品概説や条件などのパンフレットなども用意されている。

1997年度の調査では、衣服類などの繊維製品・毛皮製品・装飾品や、食器などの木製品、その他604件について、1998年度には、儀式用具、調理具や狩猟具などの木製品を中心に約1,000件について調査シートの作成、写真撮影を行った。

この調査に用いた調査票はA4版の用紙に必要事項を記入していく独自の様式のものを作り使用している。その際、資料の照合がしやすいように、資料のポラロイド写真を調査シートに貼付している。そのシートに博物館の台帳（手書きとタイプの2種）から収集年、収集地、収集者、アイヌ語名称、その用途などの必要事項を転記する。その作業はREMの職員が行い、後で日本語訳を付けている。さらに日本からの参加者が、寸法や資料の特徴を記入して、写真撮影をする。写真は35ミリカメラでネガカラーフィルムにストロボ装置を使用して撮影し、帰国してから現像、焼き付けを行うと同時にラッシュでスライドフィルムも作成している。1997年の調査からはブローニー版カメラでカラー・ポジフィルムも撮影している。

資料の多くはワシリエフという収集者が1912年にサハリンから北海道にかけて収集を行い、博物館に収めたものである。その際道内で報道された新聞記事もいくつかあることがわかっている。

また、その時ワシリエフの案内を努めた北海道庁嘱託の河野常吉は、この時の様子を記録している。それによれば、8月31日に函館から来たワシリエフと苦小牧で合流し平取町に向かい、9月6日まで滞在し、791点の資料を購入するとともに写真撮影を行った。その後、ワシリエフは札幌経由で函館に戻り、ロシア艦隊の函館寄港を待ち、母国に戻ったことを書き残している。

REMのアイヌ資料は多くのコレクション番号に分けられて登録されており、ワシリエフが収集した資料は、収集の直後から整理登録が行われたものと思われ2800番台のコレクション（4桁番号の後に、それぞれの資料の個別番号が付く）が1912年、5000番台が1913年の収集となっている。

8761、8762（収蔵庫番号）の番号が付いたコレクションにはモスクワにあった資料を移管したものや、

1923年に行われた展覧会の出品資料が含まれている。この資料の中には、MAEのアイヌ資料の多くを収集したピウスツキがサルモンペツ（門別町）で収集した資料も含まれている。

今年までに調査の終了した1,600点の中では1900年にサハリンで収集されたものがもっとも古く、もっとも新しいと考えられるのは1923年の展覧会の出品資料（その年に収集されたものかどうかは不明）である。

REMの最初の展示がオープンしたのは1923年で、MAEなどに比べると新しい博物館である。収集年をみるとアイヌ関係資料はすべて博物館の準備期間中に収集されたことになる。革命、戦争を間に挟んだにしても、その準備にかけた時間の長さに資料の豊富さが反映していることを実感した調査であった。

《MAE調査報告》

1995、1996年のロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（略称：MAE）のアイヌ関係資料調査の報告書は、1998年3月に草風館より刊行された。



『ロシア科学アカデミー
人類学民族学博物館所蔵
アイヌ資料目録』

（古原・大谷）

久保寺逸彦文庫図書資料の整理作業

昨年度に当センターが寄贈を受けました久保寺逸彦文庫について、今回は図書資料の整理作業の状況について報告します。

《整理作業》

久保寺逸彦文庫の中で、「図書資料」として分類したのは単行書、雑誌を中心とした約2,500点です。整理作業にとりかかったのは受け入れ直後の昨年7月からでした。

まず全体の見通しを立てるために、東京での予備整理調査の段階で作られたリストをもとに書名と著者名だけをすべてコンピューターに入力して、仮目録のようなものを作りました。これをふまえて、著者名・書名・発行所名・発行年月日などの基本的な書誌事項や、図書の内容の区分、図書の大きさや書き込みの有無といった形態上の特徴など57のチェック項目について、図書1冊ごとにそれらのデータを入力していく、最後にその確認を行うという手順をとっています。

基本的なチェック項目は、将来におけるセンター所蔵資料の包括的なデータベースの構築などを念頭に置いて、山田秀三文庫の図書資料を整理するさいに設けた項目とほぼ共通にしてあります。それとともに、この久保寺逸彦文庫の場合は、久保寺氏による書き込みなどが多いという特徴に配慮して、そうした点に関する項目はとくに細かく記録するようにしています。

《資料の内容と特徴》

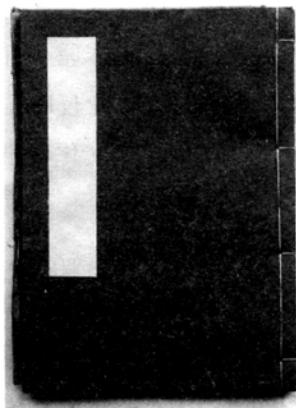
9月末現在で、整理作業は全体の6割を超え、資料の内容や状態のおおよそが見えてきたというところです。

久保寺氏はアイヌ語・アイヌ民族誌研究で大きな業績を遺されたと同時に、日本語・日本文学にも造詣の深い方でした。このことを反映して、図書資料の内容も、アイヌ語やアイヌ文化の領域とともに、日本語・日本文学の領域に関するものがその過半を占めています。

アイヌ語・アイヌ文化関係では、知里真志保氏、山田秀三氏や恩師であった金田一京助氏の著作をはじめ、高倉新一郎『アイヌ政策史』などの歴史書、バチエラーハ重子『若きウタリに』、違星北斗『コタン』などの文芸書やジョン・バチエラー、ニール・ゴードン・マンローらの洋書などがあり、久保寺氏の存命中までに発行されたものは、研究文献を中心にその多くが網羅されているようです。日本語・日本文学や言語学、音声学、民俗学、歴史学などの領域での専門書も相当な量で、『万葉集全註釈』(角川書店)、『神話伝説大系』(近代社)、『校註 国歌体系』(国民図書)、『全国方言資料』(日本放送出版協会)、『考古学講座』(国史講習会)などの全集や講座ものも比較的よく揃っています。このほか、『北方文化研究』(北海道帝国大学)、『日本民俗学会報』(のち『日本民俗学』と改題、日本民俗学会)、『民俗学』(岡書院)、『民間伝承』(六人社)、『民族学研究』(日本民族学会)などの民俗・民族学関係の雑誌や図書も多く含まれています。

* * *

一冊ごとに、透明なフィルムや模造紙、百貨店の包み紙などで造った私製のカバーなどが付けられているものが多いのも久保寺氏の蔵書の特徴のようです。カバーは図書ごとにぴっちりとしたサイズで造られており、痛みのひどい図書には表紙を作り直したり紐で綴じなおしていたりするものもあるなど、氏がこれらの本を大切に扱っていた様子がうかがえます。



〔写真1：資料No.1273〕

たとえば〔写真1〕は『詞八衢』^{ことばのやちまた}という江戸時代に著された国語学書です。相当古い和書なので痛みもひどかったのか、だれかが製本しなおしたとみえ、本文以外の表紙などは取り替えられており、もとの本の奥付に相当するページの紙だけが挟まれて残っています。〔写真2〕は、1953（昭和28）年に日本常民文化研究所から刊行された知里真志保『分類アイヌ語辞典 植物編』ですが、もとの本は白色の紙を表紙に用いた並製本と呼ばれる製本だったものを、青色のしっかりした布クロースを表紙にしたハードカバー（硬表紙本）に綴じなおし、表題などの文字は金色で箔押しして、さらにビニールカバーを施してあります。この本の奥付の裏には「1971.1.29日 製本受け取る」と久保寺氏による鉛筆書きがあります。また、たいていの図書には、とびらや奥付のページなどに、「久保寺逸彦蔵書」・「逸彦」・「久保寺」などと記された数種類の蔵書印が使い分けされて押されています。

久保寺氏による書き込み、傍線、アンダーラインなどが多く見受けられることも特徴です。書き込みには硬めの鉛筆の芯を細く削ったらしい細かな文字が多く、傍線なども多くはきちんと定規をあてがつて引いたまっすぐな線です。巻末にはその本を入手した日や読み終えた日の日付けを書いてあるものも



117



〔写真2：資料No.117〕

少なくありません。これらの書き込みの状態からみて、アイヌ語・アイヌ文化関係の図書にはそのほとんどに目を通させていた形跡がうかがえるほか、日本語・日本文学や漢文などの図書にも、誤字脱字の訂正や、御自分の感想を書かれたりしているものが多く見られます。アイヌ語や日本語の古文、漢文の類の資料には、部分的であったり全体的であったりはしますが、細かく訳を書き込まっているものもあります。

*

*

*

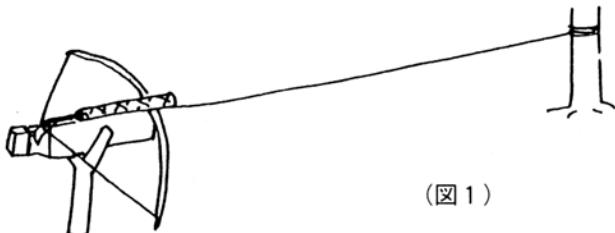
この図書資料については、今年度末に『久保寺逸彦文庫 図書資料目録』として目録を刊行する予定です。

(小川・貝沢)

アイヌの仕掛け弓

本田 優子

私事にわたるが、息子がしばらく前からアイヌの仕掛け弓に興味を持ち、仕組みを教えろとうるさかった。アイヌの仕掛け弓とひとくちにいっても、地域や時代によりさまざまなタイプのものがあるようだが、いずれも動物の通り道に張った延べ糸（さわり糸）に獲物が触ると、自動的に矢が発射するように仕掛けられた狩猟用のワナのことである。（図1）



（図1）

とはいって、写真や絵では、どうも仕組みがわからない。博物館などの展示にしても、延べ糸や引き金が固定されているため、全体のイメージはつかめても仕組みそのものはやはり理解しにくい。

息子がようやく納得した表情を見せたのは、札幌市にある北海道開拓記念館の体験学習室で催された「アイヌ民族の狩猟具」という展示で、実際に何度も模型に糸をかけてみた時のことだった。やがて彼らは夏休みの自由研究として、仕掛け弓を作り始めた。

作業に付き合っているうちに、私自身も仕掛け弓の仕組みに関心を持つようになったが、同時にいくつかの疑問も生じてきた。その一つが「延べ糸の緩み」である。

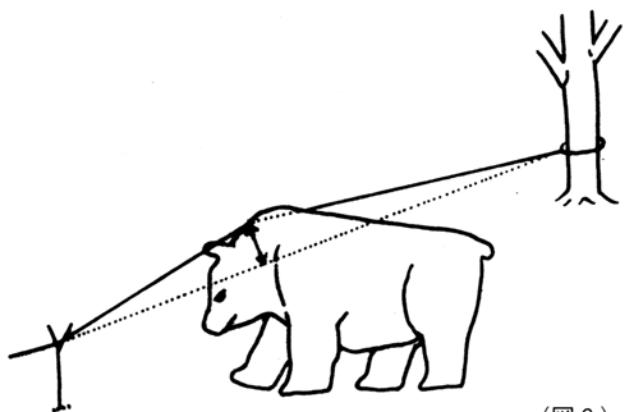
樺太を除く北海道内のいくつかの記録に、クマを捕るために仕掛け弓には、延べ糸に一定の緩みをもたせてあることが記されている。つまり、クマが糸にかかってからも30~40cm前進できるくらいの緩み

をもたせておき、緩みが完全になくなつたところではじめて引き金がはずれ、矢が発射するように調節する。すると、トリカブトの毒を塗った矢は、体長2mのクマならちょうど心臓の近くにあたるが、間違つて人間が触れても体の後ろを飛び去るので安全なのだそうだ。（図2）

この点はアイヌの狩猟具に関心を持つ人々の間では少なからず知られており、私自身もこれを“アイヌの知恵”として語った記憶がある。

それでは、その緩みの長さとはどれくらいのものなのか、いくつかの文献や映像記録を調べてみた。意外なことに、延べ糸と緩みの双方の長さについて、具体的に述べているものは少ない。

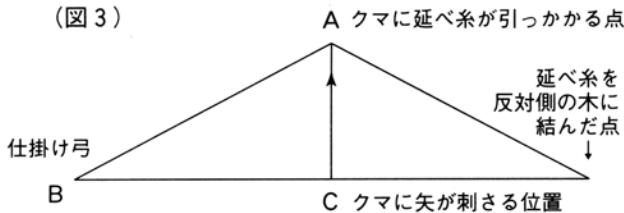
私が目にした限り、もっとも具体的な数字を記しているのは、日高の平取地方の民具を紹介した『アイヌの民具』（萱野茂、すずさわ書店、1978）であり、仕掛け弓の手元に緩みとして約33cmの輪を作るのだという。けれども、延べ糸の長さについては書かれていないので、先日、筆者にお尋ねした。すると、獲物が仕掛け弓に近すぎても矢はうまく刺さらないものなので、5mくらいだろうとのことだった。クマは鼻先を下げて歩くので、糸はうなじのあたりに引っかかり、矢はそこから30~40cm後ろに刺さるらしい。



（図2）

クマが延べ糸の真ん中を通ると仮定して、単純に図式化すると、図3のような三角形が描けそうだ。

(図3)



これに上の数字をあてはめると、 $BC = \text{約}250\text{cm}$ 、 $AB = \text{約}266.5\text{cm}$ (BC に緩みの半分である 16.5cm を加えた長さ)、 $AC = 30\sim40\text{cm}$ ということになる。

だが計算上このような三角形は成立しない。 $BC = 250\text{cm}$ 、 $AB = 266.5\text{cm}$ とすれば $AC = \text{約}92\text{cm}$ にもなる。 $AC = 40\text{cm}$ 、 $AB = BC + 16.5\text{cm}$ とすれば、 $BC = \text{約}40\text{cm}$ 。これではクマの通り道はドア1枚分の幅もない。 $AC = 40\text{cm}$ 、 $BC = 250\text{cm}$ とすれば、緩みは $6\sim7\text{cm}$ ほどにしかならない。

机上の計算と実際とでは差があると言わればそれまでだけれど、そのズレはいったいどこから生まれるのだろう。たとえば、実際には緩みがすべて引っ張りきられないうちに矢が発射されるのだと、そういう調整や工夫がなされたりしているのだろうか。そうでもない限り、33cmもの緩みは消化できそうにない。

私を含め、アイヌ文化に関心を持つ人々の間に、「わかったつもり」で流布していることの中には、ちょっと突っ込めば、実は肝心の点がほとんど具体的に把握されていないケースがあるのだということを、改めて実感している。

平成10年度前半の主な動き

[5月]

- ・歴史学研究会大会 (八王子市／出席：小川)
- ・第1回センター運営協議会

[6月]

- ・日本口承文芸学会 (東京都／出席：大谷)
- ・帯広百年記念館博物館講座(帯広市／講師：小川)
- ・共同研究「本別町生活文化誌」
(本別町／編集協力：沢井)

[7月]

- ・東京外語大学言語研修 (アイヌ語)
(東京都／講師：谷本)

[8月]

- ・北太平洋における先住民社会と交易に関する民族学的研究 (ロシア連邦共和国／谷本)
- ・共同研究「第2次在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究」
(ロシア連邦共和国／参加：古原、大谷)

センター刊行物のお知らせ

今年度は以下の刊行物を予定しています。

- ・『バラートシ・アイヌコレクション調査報告書』
- ・『ポン カンピソシ4 (住む)』(仮題)
- ・『アイヌ民族文化研究センターだより』第10号
- ・『久保寺逸彦文庫 図書資料目録』
- ・『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第5号

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F

Tel.011-272-8801(代) Fax.011-272-8850

開館／月～金9:00～17:00 休館／土・日・祝